

〔個人研究〕

羅什訳『衆経撰雜譬喻』を読む

——『維摩詰所説経』の注釈理解のために（一）

西 野 翠

まえがき

鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』の翻訳は大秦皇帝・姚興の要請で重訳されたもので、^①「羅什が梵文を片手に訳文を口述する」という形で進められた。^②訳場には羅什門下の弟子をはじめとする大勢の聴衆が同席し、羅什は訳述すると同時に經典の注釈も行なっており、その注釈のなかで多くの譬喻や物語を用いている。^③

『注維摩詰経』に残された羅什の注釈は六七〇を超えるが、そのなかで譬喻あるいは物語が用い

られているのは五〇余（うち物語は二〇余）である。羅什の注釈の多くは語句や教理の解説であるが、異国の習慣・文化の説明や經文の理解を助けるための解説などで譬喻や物語が用いられている。大乘仏教の難解な教義を大聴衆に理解させるのは容易ならざることであり、羅什は説法に娯樂性を加味し譬喻や物語を多用したものと考えられる。羅什が個々人の理解の段階に応じた説法に心を砕いていたことを示す羅什自身のことばを『注維摩詰経』（T一七七五）の中に見出すことができる。

什曰く。その利鈍に随うが故に説に広略あり。譬えば、大樹は一斧の傾くる所に非るが如し。累根既に深ければ、一法の能く除くに非ず。

或いは無常を聞くと雖も、謂いて苦ならずと言う。則ち、為に苦を説く。既に苦を聞かば、便ち苦樂の主ありと謂うが故に、無我及び空を説くなり。 (大正三八・三七五頁上)

理解力が異なる聴衆を納得させるために手を替え品を替えて熱心に説く羅什の姿がうかがえるが、羅什にとって譬喩や物語は聴衆を理解させるための補助教材だったのではないだろうか。仏教説話を集めたいわゆる「雑譬喩」のひとつに羅什訳『衆經撰雜譬喩』(T二〇八)があるが、羅什はその説話を『注維摩』における注釈でも用いている。『衆經撰雜譬喩』は羅什の翻訳、殊に『維摩經』を研究するうえで役立つ資料と思われる、ここに全体の書き下しを試みた。紙数の関係で、今回はそのうちの巻上を発表し、次回に巻下と『衆經撰雜譬喩』の内容分析を、そして三回目に『注維

摩詰經』における羅什の注釈と『衆經撰雜譬喩』との関係についての論述を発表させていただく計画である。

『衆經撰雜譬喩經』について

『大正新脩大藏經』の中に「雑譬喩」を名にもつ經典は五部あり、そのうち三部はいずれも『雑譬喩經』と名づけられている。すなわちT二〇四『雑譬喩經』(一卷)後漢 支婁迦讖訳、T二〇五『雑譬喩經』(二卷)失訳、T二〇七『雑譬喩經』(二卷)道略集である。他の二部はT二〇六『旧雑譬喩經』呉 康僧会訳(二卷)、T二〇八『衆經撰雜譬喩』道略集・姚秦 鳩摩羅什訳(二卷)である。「雑譬喩」というその名の示すとおり、これら經典には種々雑多な譬喩や因縁話が収められている。杉山 [1991a]によると、これらの經典が実際にサンسكريットないしそれに類するインド系言語から訳出された經典かどうか、ま

たこれら經典が記録にある訳者によって実際に訳出されたものかどうか確かではないという。さらに、これら雜譬喻經類は中国において既成の漢訳經典から集められたものではないかとの疑いも起こったようだ。

羅什訳とされる『衆經撰雜譬喻』は上下二巻から成り、上巻に二十三、下巻に二十一、全体で四十四の喩え話が収められている。これまでのところ全体の書き下しや和訳は存在しない。ただ、すぎ出版『仏教説話大系9 比喩と因縁(一)』

(一九八一年)にはいわゆる再話という形で『衆經撰雜譬喻』から十七話が取り上げられている。しかし、脚色のためもあるのかもしれないが、原文とかなり違っている例も少なくない。例えば、第四話の「持戒之人無事不得、破戒之人一切皆失」(それぞれの話にタイトルは付されていないため、筆者は冒頭の一文を題に当てる)には「馬を食べた王」という題が付けられており、ある国の王が戦時に備えて選りすぐりの軍馬を飼っていたが、長く平和が

続き馬を養っておくのは無駄だと食用にしたり、訓練を怠ったりしたために敵が攻めてきたときには全く役に立たなかったという内容になっている。しかし実際に原文を読んでみると、戦さはないからと軍馬に目隠しをして石臼を引かせていたら、隣国が攻めてきたときに馬はぐるぐる旋回するばかりで敵陣に突進していかず役に立たなかったという話だった。こうしたこともあり、『衆經撰雜譬喻』全体の書き下しを作ることも自体にも何がしかの意味があらうかと考えた。

『衆經撰雜譬喻』の内容の分類等については、三回に分けての発表となる本稿の第二回目で述べる予定だが、いまここで言えることは、羅什の注釈には様々な長さの二〇余りの物語があり、それらはすべて論点をはっきりさせるための譬喩や寓話として用いられているということ、羅什は類比や譬喩や寓話を多く用いる注釈手法 (hermeneutic strategies) を用いているということである。

僧肇は『注維摩詰經』(T一七七五)の序で、

「此經所明、統萬行則以權智為主（この經の明かす所は、万行を統べるに則ち權智を以て主と為す）」（大正三八・三二七頁上）と記している。類比や譬喩や寓話も、この權智すなわち方便の智慧の具体的な方法に当たるのではないだろうか。

『維摩經』の訳場において羅什が聴衆に講釈をするとき、「譬喩」をどのように用いていたかという視点で、『注維摩詰經』における羅什の注釈を読み解くのが本稿の目的である。

鳩摩羅什訳『衆經撰雜譬喩』（書き下し文）

（一）智者は財物の久しく保つべからざるを思惟す。譬えば失火の家の如し。

點慧（機敏で知恵がはたらく）の人、火勢を明らかに識り、火の未だ至らざる時、財物を急ぎ出す。舍、焼尽すと雖も財宝全く在り。更めて屋宅を修し利業を広く開く。智人、福を植え布施を勤め修むるも亦た復た是の如し。身の危脆にして財物の無常なるを知り、福田に遇^{たまたま}値い時に及んで布施する

は、亦た彼の人、火中に物を出し後世に樂を受くるが如し。亦た彼の人、更めて宅業福利を修し自ら慰むるが如し。愚惑の人、但だ惜念を知るのみ。匆匆として営み救い狂惑して智を失い量らず、火勢猛風絶焰の土石俱に焦がし須臾の頃、蕩然として滅し尽くす。屋^{おく}既に救わずして財物喪失し、飢寒凍餓憂苦のうちに世を畢る。慳惜の人、亦た復た是の如し。身命の無常にして須臾も保つべからざるを知らず。而して便ち聚斂し守護し愛惜するも、死の来るに期無く忽然として殞逝^{すがた}す。形は土木の如く、財物俱に棄つ。亦た愚人の如く、憂苦して計を失う。明慧の人、乃ち能く覺悟し、身は幻の如くして財は保つべからざるを知る。万物無常にして、惟だ福を待むべし。將に人、苦を出でて成道を得べし。

（二）菩薩の布施するに身命を惜しまず。

如昔（むかし）、尸毘王、身を以て鵠（ハト）に施さんとす。天帝釈故に往きて之を試す。菩薩の志有

るやいなやを知らんとす。釈、毘首羯磨天（天帝
 釈の侍者）に語れり。「汝、鵠の身と作り、我れ当
 に鷹と作りて汝を逐うべし。汝、便ち怖れを伴り
 て（怖れるふりをして）、王の腋下に入れ。」俄に毘首
 即ち自ら身を返して鵠と作り、釈身を返して鷹と
 作り、急ぎ飛びて鵠を逐うに、鵠直ちに王の腋下
 に入りて身を挙げ戦き怖る。是の時、鷹樹上に住
 り、王に語りて言う。「汝、我が鵠を還せ、此れ
 は是れ我が食にして、是れ汝が有に非ず。」王の
 言う。「我れ初め発意し、一切衆生を救わんと欲
 し、苦を度せしめんと欲す。」鷹の言う。「王の一
 切衆生を度するに、我れ是れ一切衆生の数なるに、
 何ぞ独り以て慫慂まれずして、我が食を奪うや。」
 王の答えて言う。「汝、須く何をか食らうべき」
 鷹の言う。「我れ誓いを作せり、新たに殺せし血
 肉を食わんと。」菩薩の言う。「我れ誓いを作せり、
 一切衆生の来りて我れに帰するものは一心に救護
 し難に遭わざらしめんと。汝、須く何をか食らう
 べき。当に相い給与すべし。」鷹の言う。「我が食

らう所は新たに殺せし血肉なり。」王の即ち念じ
 て言う。「此れ亦た得難し。自ら殺生せざれば則
 ち由つて得る無し。云何ぞ、一を殺して一に与う
 る。」思惟し心定めて即ち人を呼び来る。「刀を持
 ちて自らの股肉を割き鷹に与えん。」鷹の王に語
 りて言う。「唯だ肉を以て我に与えよ、当に道理
 を以て肉と鵠の軽重正等ならしむべし。欺かるる
 こと勿れ。」王の言う。「秤を持ち来り、肉を以て
 鵠に對せん。」鵠の身の軀た重く、王の肉の軀た
 軽ければ、王二股の肉を割きて尽くさしめども亦
 た軽く不足なれば、次に両臑（こしほね）、両乳、
 胸背を割き、身を挙げて肉尽くるも、鵠の身猶お
 重し。是の時、王、身を挙げて上せんと欲す。乃
 ち鵠と等し。鷹、王に語りて言う。「大王、此の
 事辦じ難し、何の用ありて此くの如くす。鵠を以
 て我に還せ。」王の言う。「鵠、我れに来りて歸す
 れば、終に汝に与えず。我、前後身を喪うこと少
 なからず、初め法を為さずして愛惜有りたれど、
 今仏を求めて便ち振り上心に称いて定めて悔い無

からんことを欲す。」諸天、龍神、一切人民の皆共に讃えて言う。「一の小さき鴿の為に酸毒する（悲しみ痛む）こと乃ち爾なり。是の事、希有なり。」地為に大いに動きて毘首、善きと讃えり。「大士真に実にして虚しからず。始めて是れ一切衆生の福田たり。」釈及び毘首復た天身に還り、即ち王の身も復た故の如くに還らしむ。求道は此の如くして乃ち仏を得べし。

(三) 昔、一人有り、使を受け遠く行きて空舎に独り宿る。

中夜、一鬼有りて死人を擔ぎ来りて其の前に著す（下ろして置いた）。後れて一鬼有り、逐い来りて前の鬼を瞋り罵る。「是の死人、是れ我が許なり。汝、なんぞ擔ぎ来るや」二鬼、各（死人の）一手を捉え之を諍う。前の鬼、言えり。「此に人有り、問うべし。是の死人、是れ誰が擔ぎ来るや」是の人、思惟す。「此の二鬼、力大なり。若し実語せば（本当のことを言えば）、亦た当に死すべし。若し

妄語せば、亦た当に死すべし。二つながら俱に免れず。何ぞ妄語を為さん」語りて言う。「前の鬼の擔ぎ来れり。」後の鬼の大いに瞋り、（答えた男の）手を捉えて抜き出して地に著す。前の鬼、死人の一臂を取りて之を補せば即ち著す。是の如くして、両脚、頭、脇、皆抜き出されぬ。死人の身を以て之を安ずる（取り付ける）に故の如し。是に於て、二鬼易えし所（死人のものと取り換えた部分）の人身を共に食ひ、口を拭いて去れり。其の人、思惟す。「我が父母、我が身を生む。眼に、二鬼の（父母が生んでくれた体を）食ひ尽くすを見る。今、我が此の身、尽く是れ他身の肉なり。我れ今、定めて身有るや。身無しと為すや。若し有る者を以てせば尽く是れ他身なり。若し無き者とせば、今現の身は是の如し。」思惟し已って其の心迷悶し、譬えば狂人の如し。明旦、路を尋ね而して前国に去り到れば、仏塔に衆僧有るを見る。余事を問うべからざれば、但だ己が身の有るや無るやを問えり。諸比丘の問えり。「汝、是れ何人ぞ」答

えて言う。「亦た自ら知らず、是れ人なるか人に非ざるかを」と。即ち衆僧の爲に上事を広説せり。諸比丘の言う。「此の人、自ら無我を知る。易く得度すべし」而して之に語りて言う。「汝の身、本従り已來、恒に自ずから無我にして、今に適るに非ざるなり。但だ此の四大合するが故に計りて我が身と爲る。」即ち度して道を爲し、諸煩惱を斷じ即ち羅漢道を得。是が爲に能く無我虚なるを計らば、得道は遠からず。

(四) 持戒の人、事の得ざること無し。破戒の人一切皆失う。

譬えば人有りて常に天に供養し、其の人貧窮すれば四方に乞ひ求め、供養すること十二年を経て、富貴を求索するが如し。人の心既に志せば、天此の人を慇懃み自ら其の身を現じ、而して之に問いて曰く。「汝、何等を求むるや。」「我れ富貴を求む。心の願う所一切皆得せしめんと欲す。」天一器を与う。名を徳瓶と曰う。而して之に語りて言

う。「君願う所の者、悉く此の瓶従り出でん」と。其の人、意に随ひ欲する所を以て得ざる無きを得て、意の如く已に具に好き舎、象、馬、車、乗を作すを得たれば、七宝具足し賓客に供給し事乏しきこと無し。客、之に問いて言う。「汝先に貧窮なりしに、今日云何ぞ此の如き富を得るや。」

答えて言う。「我れ天瓶を得。天瓶の中より此の種種の物出づ。故に富むことは是の如し。」客の言う。「瓶を出だせ。出す所の物を見視ん。」即ち爲に瓶を出す。瓶の中より種種諸の物を引き出せば、其の人驕逸にして瓶を捉り起舞し、之を執ること固ならずして手を失して瓶を破り、一切諸の物俱に時に滅し去る。持戒の人種種の妙樂願つて得ざる無し。若し人、戒を毀り驕逸して自ら恣にせば、亦た彼の人の如く瓶を破り物を失わん。是を以て天の樂及び涅槃の樂を欲し、當に禁戒を堅持し受戒せし所を破る莫れ。若し受戒せし所を破らば、永く三塗（三途。三惡道）に墜ち苦を受け乃ち復た出る期無からん。夫れ人の報応を欲求せば、常に

当に善心を修習し相續して絶ゆべからず。若し命終の時あらば、能く諸惡を卻け、善き果報を受けん。然る所以は、若し先に善心を習せざれば、設え命終る時心を善ならしめんと欲すれど、卒に意に従わず。譬えば西方に一国王有りて、素馬無ければ、国藏を減損して四出し推求し、五百匹の馬を買い以て外敵を防ぎ以て国を安んずるに足るが如し。馬を養うこと既に久しく國中無事なり。王便ち思惟す。「五百匹の馬、食用（馬の食糧）少なからず。飼養の煩勞、国事に益無し」と。便ち所典（担当者）に勅して、眼を掩いて磨かしむ。自ら食を得ければ国藏を損せず。馬磨きて既に久しく旋廻に習す。忽然として隣国兵を興して入境す。王便ち勅して馬に具莊（具装）することを約す。勇将乗騎すること戰鬪法の如く、馬に鞭し陣に向かいて直に前み入らんと欲す。諸の馬鞭を得て尽く旋廻して走り、敵に向かうの意無し。隣賊之れを見て能う所無しと知り、即便にして直に前みて王軍を大破す。是の故を以て知る。善果報を欲し

求むれば、命終る時に臨み心馬乱れず、則ち随意に往くを得。先に心馬を調え直すべからず。若し先に心馬を調え直さざれば、死の賊卒に至り、心馬の盤廻して終に意の如くならず。猶お王の馬の賊を破り其の国を保全する能わざる如し。是れ人の善心を行ずるを以て、常に胸心に在らざるべからず。

（五）貧窮の人、身口を割輟して布施を持用せば其の福無量なり。

譬えば往昔（むかし）、国王設会し諸仏及び僧に種種供養するが如し。時に一貧窮の老母有り都て有る所無く、常に仰乞し索めて以て自ら活命す。王の仏に請うて設会すと聞き、心に歡喜を生じ意に勸助せんと欲す。自ら物無きを惟えど、正に少しの豆有り勸助せんと欲す。而して門人前むを聴さず。是に於て仏其の善心を見て、即ち神力を以て此の大豆を衆の食器の中に遍く墮せしむ。王此の豆を見、即ち廚兵を瞋る。「なんぞ食中に此の豆

有らしむるや。」仏の王に語りて言う。「廚兵の過ちに非ず。乃ち是れ外の貧窮の老母の施せし所なり。王の設会を聞き以て勸助する無きに、此の少しの豆を持ちて王に勸助す。是を以て食中に此の豆有るのみ。」

仏、大王に語り。此の老母の施せし所微なると雖も、福を得ること良に大王より多し。」王の言う。「何ぞ多種種の肴膳の供養を得るに而も福を得ること少なるや。此の老母少し許りの物を以て布施し返つて福を得ること多し。」仏、王に語りて言う。「王、種種供養すと雖も、尽く出せしは百姓にして王には損無し。此の老母貧窮にして正に少し許りの豆有り、尽く持ちて勸助す。是の故に得ること多し。王の福を得ること少なし。」
 仏、王の為に種種説法す。王及び老母皆道跡を得たり。是を以て福を修し徳を種え至心に在りて惟えり。法相を達解するに、何ぞ不果（果なき）を憂えん。

（六）昔、一婆羅門有り、居家貧窮なるに正に一牴（めす）牛有り、

犢（牛や山羊の乳を搾ること）乳して日に一斗を得、以て自ら供活す。十五日に諸衆の僧沙門に飯すれば大なる福德を得んとの説を聞き、便ち止めて復び犢牛せず。停めること一月に至りて并めて取り、三斛を得て諸沙門を供養するに持用せんと望む。満月に至り便ち諸沙門を大いに請じ舎に至りて皆坐す。時に婆羅門即ち入りて乳を牛し正に一斗を得たり。久しく犢乳せずと雖も多からず。諸人呵め罵りて言えり。「汝癡人なり。云何ぞ日日犢せず乃ち一月に至ると雖も多く得るを望めんや。」
 今の世の人亦た是の如し。財物有る時多少に随つて能く布施せず、停積すること久しき後に多きを須ちて乃ち作さんとす。常無き水火の及べば以て身命須臾も保ち難し。若し不遇に当たりて一朝蕩尽し虚しくして獲る所無からば、財物身を危うくすること、猶お毒蛇の無得にして貪著するが如し。譬えば昔日、仏の波斯匿王の国中に遊び、地に伏

藏（地中に埋めてある宝の蔵）有りて中に宝物の満つるを見るが如し。仏阿難に語れり。「汝は毒蛇を見るやいなや。」阿難の言う。「已に見る。」時に人有りて仏の後に随い行き、此の語を聞き試みに往きて之を看るに好き宝有るを見る。仏此の語を謂いて虚綺を為せるやと嫌う。此れ実は是れ宝なるに、而して言いて毒蛇と為せり。其の人、即時に私かに家人の大小（大も小もみなすべて）を將いて此の宝物を取り、其の家大いに富めり。人有りて王に向かいて之を言えり。「此の人宝蔵を得るに随つて而して官に輪はこばず。」王即ち收繫し、其の宝物を責め即時に輪はこび尽せり。王故に信ぜず更に多くの方をもつて之を拷治す。痛毒備さに至るも復た首もちさず。王大いに怒り其の七世まで誅せんと欲し、載出し殺さんと欲す。王人を遣わし何の道説を為すかを微かに伺う。即ち言えり。「仏の語至誠なり。実に是れ毒蛇なり。而れど我信ぜず、今毒蛇の由る所と為れり。知れり、当に何云なるかを。若しや毒蛇の殺す所と為らば正に身に及ぶ

べし。而るに今乃ち七世に及ぶ。実に語られたる如し。」使者具さに上事を王に向かいて陳説す。王此の語を聞き即ち喚びて還らしめ、其の人に語りて言う。「仏是れ大功徳の人なり。而して汝能く仏の往語（以前の言葉）を憶えたり。」王大いに歡喜し其の宝物を還し、之を放ち去らしむ。仏の語を念ずる縁の故に死の難を免るるを得たり。是れ以て仏語は之を志心に念ぜざるべからず。

（七）持戒の人寧ろ身命を失うも仏の教えに違わず。譬えば往日、賈客有り船に乗り海に入るに、時に二人有り他国に至らんと欲し、傍らに載りて中流に至り、悪風の吹いて船舫を破るに値遇し、諸賈客依る所を取つて用いて以て自らを濟うが如し。時に下座の道人、一の板木を得たり。上座語りて言う。「仏法を説くに上座を恭敬す。汝、我に板を与え來れ。」下座の道人是の語を聞き已りて便ち自ら思惟す。「何れをば重きと為すや。戒を護

るを重きと為す」と。是れを思惟し已る。「我、寧ろ当に慎しんで仏の教えを護りて死ぬべし。」即ち板木を以て上座に献ず。下座便ち海水中に没す。水神、道人の戒を持することは如く仏の教えに違わざるを見て、是の道人を將けて岸上に至る。此に因りて道人至誠に戒を持するが故に、一船の賈客皆死なざるを得たり。水神の道人を讃えて言う。「汝真に是れ持戒の人なり」と。是の証の故を以て寧ろ戒を持して死すも、戒を犯して生くることなからん。是を以て戒の徳は恃怙すべく、能く生死の苦を濟うべし。

(八) 一切衆生世の樂に貪著し無常を慮らず、大患を以て苦と為さず。

譬えば昔、一人有り事に遭いて応に死すべくして、繋がれて牢獄に在るに、死を恐れ而して逃走するが如し。国の法、若し死囚有りて獄を踰えて走らば、即ち狂象を放ちて踏み殺さしむ。是に於て狂象を放ち此の罪囚を逐わしむ。囚象を見、至りて

壚井の中に走り入らんと欲す。下に一大毒龍有り口を張ぎて上を向く。復た四毒蛇井の四辺に在り一草根有り、此の囚怖畏して一心に急ぎて此の草根を捉う。復た両の白鼠有り、此の草根を噛む。時に井の上に一大樹有り、樹中に蜜有り。一日の中、一滴の蜜此の人の口中に墮つる有り。其の人此の一滴を得て、但だ此の蜜を憶いて復た種種の衆苦を憶わず、便ち復た此の井を出んと欲せず。是の故に聖人借りて以て喩えと為す。「獄は三界、囚は衆生、狂象は無常、井は衆生の宅也、下の毒龍は地獄なり。四の毒蛇は四大なり。草の根は人命の根なり。白鼠は日月なり。日月人命を剋み食して日日損滅し暫らくも住まること有る無し。然るに衆生世樂に貪著し大患を思わず。」是の故に行者当に無常を觀じ以て衆苦を離るべし。

(九) 昔、慳貪長者有り。仏之を度さんと欲し、先ず舍利弗を遣わし為に布施の福の種種の功德を説く。長者慳貪なれば都て施すの意

無く、日の中ちゆうせんと欲するを見て舍利弗に語る。

「汝何んぞ去らざるや。我汝に与うる食無し。」

舍利弗、化すべからざるを知りて、即ち仏の所に還る。仏復た目連を遣わし、神足もて返り化して為に法を説く。長者復た言う。「汝我が物を得んと欲するが故に此の幻術を作す。」目連、其の化すべからざるを知りて、即ち仏の所に還る。是に於て仏、必ず其の慳貪を破らんと、自ら其の家に造る。長者、仏自ら来るを見て為に礼を作し、仏を將いて座に入る。仏、方便し種種に法を説き、長者に語りて言う。「汝能く五大施を行ずるやいなや。」長者仏に白せり。「我小施も猶お尚お能わず。況んや復た大施をや。」長者仏に白せり。「云何が五大施なるや。」仏の言う。「五大施とは、殺生することを得ざるなり。汝能く作すやいなや。」長者思惟す。「不殺生は乃ち我が財物を用いず又た損する所無し。」即ち仏に白して言う。「我能くす」と。是を以て次第に説を為し乃ち不飲酒に至る。皆言う。「能く作す」と。是に於て仏即ち長

者の為に種々法と五戒義を説く。「若し能く此の五戒を持さば、便ち五大施を作し竟ると為す。」

即ち大歡喜し、一張の好からざる氎（細い糸で織った高価な織物）を以て仏に施さんと欲し、即ち庫に入り求むるに、好からざるもの無ければ、便ち一張を以て而して仏に奉施す。庫中の余の氎（細い糸で織った高価な織物）尽く相隨つて来り、仏の前に至る。仏長者の施心不定なるを知り、長者に語りて言う。「天帝釈と阿修羅共に闘うに、心不定なるが故に三返如かず（敵わなかった）。後に定心を以ての故に阿修羅、軍を大破す。」長者聞き已りて、仏なる大聖人意を深く知れるを知り、信心清淨たり。仏説法を為し、即ち須陀洹道（注（4）を参照）を得たり。明くる日、魔其の心を知り即ち化して仏と作り来りて之を壊さんと欲し、而して其の家に至る。長者他心智を未だ得ざるを以ての故に是れ魔と知らず之を歡喜して迎え、来るを善しとし將いて座に入る。魔の仏、長者に語りて言う。「我れ昨日説きし所は尽く是れ仏の語に非ず。汝速やかに之を捨てよ。」

長者此の語を聞き已り、甚だ大いに之を怪しむ。

「形是れ仏なると雖も説く所は非なり。獅子の皮の驢（ろば）を被うが如し、形獅子に似ると雖も心是れ驢なり。」長者信ぜず。魔其の心正しきを知り、復た其の身に還つて言う。「我れ故に來りて汝を試すに、而も汝の心転ずべからず。」是の故に経に言う。「見諦の人尚お仏の語を信ぜず。何ぞ況んや余道をや。深く理を察するの故を以て。」是の故に仏の弟子深き理を解し、魔の説き仏の説くを悉く皆能く知るを要す。是の故に義学ばざるべからず、施修せざるべからず。

（一〇）行者道を求むるに、好き美色に貪著するを得べからず。

若し貪らば、人の功德の本を破る。譬えば昔、一阿羅漢（尊敬や供養を受けるに相應しい聖者）有り、常に龍宮に入りて食し龍の為に法を説くが如し。食し已りて龍宮を出で、鉢を持し沙弥に授与し、鉢の中に残れる数粒の飯を洗わしむ。沙弥之を噉う

に大香甚だ美わし。便ち方便を作して師の繩床の下に入り、両手で繩床の脚を捉う。時至りて繩床と俱に龍宮に入る。龍の曰く。「此れ未だ道を得ざるに何ぞ以て將れ来るや。」師言う。「覚えざらず。」沙弥飯食を得、又龍女の身体の端正にして香妙無比なるを見る。心大いに貪著して即ち誓願を作す。「我当に此の龍処を奪い、其の宮に居すべし。」龍の言う。「後更に復た此の沙弥を將れ来るなかれ。」沙弥還り已りて一心に布施持戒し早く龍身と作らんと、願う所を専ら求む。是の時、寺を遶るに足下に水出づ。自ら知る、必ず龍と作るを得たりと。徑ちに師の本入りし所の処の大池の水辺に至り、袈裟を以て頭を覆い而して水中に入り即ち死す。（水中から）返りて大龍と為り、福德大なるが故に即ち彼の王を殺す。池挙げて尽く赤し。未だ爾らざるの前、諸師衆僧皆之を呵め罵る。沙弥言う。「我が心已に定まり諸相已に出づ」と。諸衆僧將いて池に就きて之を見る。是の因縁を以ての故に、当に好き香美色に貪著すべからず。

善根を喪失し惡道に墮^{おと}さる。

(一一) 昔、天人有り食福尽きんとし、七証ありて自ずから知る――

一は頭上の華萎る。二は頸中の光滅す。三は形身損瘦す。四は腋下に汗出づ。五は蠅来りて身に著す。六は塵土衣に坐す(集まる)。七は自然に本座を去り離る。福尽きて世間の貧窮の家に下生し疥癩の母猪と與に子を作すを自ずから知り愁憂し樂しまず。更に一天人有り来りて問う。「汝なんぞ樂しまざるや」答えて曰く。「吾が寿、將に終り下生し疥癩の母猪の為に子を作さんとす。是の故に愁うるのみ」と。彼の天曰く。「釈迦文仏、忉利天宮(帝釈天の住む天宮)に在りて母の為に説法す。当に往きて帰依し比丘僧に及べば苦を免るを得べし。」便ち仏所に往き詣りて志心に帰命し七日の後に寿尽きぬ。世間の大長者の家に來生し、母妊娠の後恒に三帰の声を聞く。十月満つるに至り乃ち地に生まれ墮ち長跪叉手して仏法僧に帰命す。

其の母驚きて是れ不祥なりと謂いて便ち之を殺さんと欲するも、思惟して言う。「長者の子便ち爾あるべからず。我に罪すること少なからず。」即ち長者に往きて白し、此の意を具さに説く。長者の言う。「人に生まれ世に居れども三尊に帰命するを知らずして此の子を生む。纔かに生まれて已に三尊を知るは將に是れ神人なり。之を好く養い怪しむこと勿れ。」此の兒の福才聡きこと特異にして、父母愛重す。年五歳に至り、同輩と道の辺に戯る。時に舍利弗目連^よ過ざるに、前みて為に作礼す。舍利弗曰く。「未だ小兒の此の如くに作礼するを見ず」と。兒、道人に白す。「相識らざるや」と。舍利弗即ち入定して其の本相を觀るに、乃ち是れ彼の天人なりと知る。便ち長跪し舍利弗目連に詣でる。「尊に願う。為に仏及び僧を請じ、明日鄙舍に造り食せんことを。」即便に之を許す。兒歸りて父母に白して言さく。「舍利弗目連に向かつて請い、世尊明日意を屈して飯食せんことを願えり。」父母歡喜し即ち為に財を竭くして膳食

を上^のぼせ具う。明くる日、仏諸大衆を將いて其の家に往き到る。兄及び父母、仏を迎え作礼す。仏即ち座に就き、行水下食須臾に已に訖り、仏為に法を説く。父母及び兄皆、無所從來（如来）の法忍を得、百千の天人、無上正真道意^⑥を發す。經に言う。能く慈を尽くすとは此くの如きを謂うべきかな。

（一二）昔、放牛人有り。大沢中に在りて、金色の華の光明善好なる有るを見て、

自ら即ち念を生ず。「仏此を去ること遠からず。当に取りて供養せん」と。即ち華数斛を採り重擔して去る。未だ道中^{なかば}に至らずして牛の舐殺する所と為る。心仏に存りし故に即ち第二忉利天上に生まる。受けし所の宮殿は広博嚴好にして宮は四辺に出で、陸は金色の華を生ず。光明徹照して諸天の法適^{まさ}に天上に生ず。先に宿命の却つて天福を食するを觀る。時に彼の天人自ら宿命を觀て、具さに華を採りて牛の殺す所と為るを具に見て歡喜

し歎じて曰く。「仏の無量の福祚よ。未だ設供に及ばざるに報い已に巍巍たり。況んや恒に徳を修むる者をや。」便ち復た其の宮辺の華を取り并せて種種の余の供養の具を持し、本の願に遵わんと欲す。諸天其の華を取るを見て皆往きて之に問う。「汝方に來りて福を受け、当に五欲自ら樂しむべし、而るに華を採るや」と。天子報えて言う。

「吾人為^たりし時、仏に詣で華を以て供養せんと欲せしが竟に願を果さず。尚お此に來りて生まるるを得、況んや作すを得たるにおいてをや。今華を採る所以は、本願に遵^{ます}い増^{ます}福を將來せんと欲するにあり。」爾の時、諸天皆な善心を生ず。八万四千の天子有り俱^{ともども}共に來り下りて天の伎樂を作し天花天香種種供養す。諸塔寺中未だ仏を見ざるに、復た上座の道を得たる比丘有りて為に法を説く。諸天法を聞き心皆な歡喜し諸功德増して、遂に仏を見るを得。鼓樂絃歌して、衆の名華を散じ仏及び衆僧に種種供養す。仏為に清淨なる妙法を説く。其の人及び八万四千の諸天、皆な法眼の淨

きを得たり。此の天子の八万諸天とともに、皆な昔日の善知識なり。今相い發起し一時に道を得たり。

(二三) 昔、外国に一大長者の大いに富める有る有り。

惟だ一子有りて愛重すること無比なり。後日病を得て大いに困しむ。之を治するも瘥えず遂に無常に到る。命終る時に臨み一心に念仏す。仏其の前に形を現し、心安らかに意定まりて便ち天に生まるるを得る。父母の子を念じ愁悩して便ち自殺せんと欲するも自ら解する能わず。因つて火を以て焼き其の骨を取りて銀瓶中に著し、月十五日に至る。便ち百味の飲食を施して其の前に持著し〔備えた飲食を〕持ったままで、声を挙げて悲しみ哭きて宛転臥地す〔地面に転げまわって苦しむ〕。天子上に在りて其の為す所を見、自ら念ず。「我れ現化せずば意終いに解せず」と。即ち下りて小兒と作る。年八、九歳なり。道の辺に在りて放牛す。牛卒に

死し地に臥す。小兒便ち行きて草を取り死せる牛の口に著す。挙げて杖を以て牛を打ち呼びて言う。「起きて食べよ」と。父母大小に〔すべて、つぶさに〕小兒の為す所を見、便ち共に之を笑い、前みて問いて言う。「卿、誰が家の子ぞ。何ぞ癡なること乃ち爾なるや。牛今已に死ぬるに、草を挙げて口に著す。寧ぞ食するを期すること有らんや。」而して反して笑つて言う。「我が牛今死せりと雖も頭口故のごとく在り。(然れども) 草を挙ぐるに食わず。況んや君の兒死来已に久しきにおいてをや。火を加えて之を焼き唯だ少しの焦骨地に在るのみ。百味の食を以て前に著し而して加えて啼哭す。寧ぞ之を食するを得んやいなや」と。其の父の意即ち開解し兒に問う。「卿、是れ何人ぞ」と。兒の言う。「我れ是れ長者の兒なり。今仏恩を蒙り天上に生まるるを得たり。父母の悲悩太いに甚しきを見る故に來りて相化するのみ」と。父の意解け大いに歡喜して復た愁憂すること無し。天子忽爾として現えず。父母家に歸り即ち大いに

布施し、禁戒を奉持し、經を読み道を行じ、須陀洹果（注（4）を参照）を得たり。

（一四）昔、無數の世時、一の仏國有り、中に沙門數千余人有りて其の中に止住す。

諸沙彌數百人を遣わし分衛^⑦を行じ衆僧に供給せしむ。日米^{ひび}一斛^{はく}を輸^はび、師便ち一偈を兼ねて課す。

一沙彌有りて、時に市中を過ぎ行き且つ經を誦す。時に肆上に賢者有り。沙彌の行くゆく誦するを見て、礼して問いて曰く。「道人行くに何の説く所ぞ。」答えて曰く。「分衛して僧に給し兼ねて一偈を誦す。」賢者又問う。「若し事無くば幾偈を誦すべしや」と。答えて曰く。「十余偈を得べし。」又問う。「分衛すること幾日ぞ。」曰く。「九十日なり。當に九十斛の米を輸ぶべし。」賢者道人に謂いて誦せり。「但だ還りて意を安んじて經を誦せ。我れ當に相代わりて米を出さん。」沙彌大いにぶ。賢者米九十斛を与う。還りて師に報じ已り便ち閑にして經を読む。三月を経て千四百偈に通ず。師

に啓す。「經を誦すこと已に訖る。要ず當に檀越^{だんおつ}の家に詣り之を試さん。」師即ち聽^きす。賢者の所に詣り報じて曰く。「君の重惠を蒙り安んじて經を誦するを得たり。今經已に止むが故に來りて之を説く」と。沙彌誦す。文句流利にして躓礙^{そくがい}有ること無し。賢者歡喜し稽首して礼を為す。「我れ來世に聰叡、博達、多聞にして忘れざるを願う。」此の福に因つて願いたれば、世世生まるる所明識にして強記なり。仏の世に出で現るに及び弟子と爲る。名づけて阿難と曰う。常に世尊に侍すること特独にして辯通博聞第一なり。師曰く。「時の賢者、今の阿難是れなり。夫れ學ぶ者を勸助して願いを志求するは功德虚しからず。是の福の報いに縁つて願に隨いて是の如きを得たるなり。」須弥山南に一大樹有り、高さ四千里、諸の鉢叉鳥^{はつしやう}其の上に棲宿す。樹常に動かず。小さき鳥の形鶉鴒^{うずら}（うずら）に類する有りて其の上に住止すれば、樹即ち振り揺らぐ。鉢叉鳥、樹神に語りて言う。「知ること無し、我が身將に重からんに初め動か

ざるを。」小さき鳥未だ宿らざるに反つて更に振動す。樹神の言う。「此の鳥小なりと雖も、大海の底従り来りて純に金剛を食す。金剛の物為るや墮つる所の処、破壊せざる無し。所以大いに怖れ自ずから安んずる能わず。」経は以て喩えと為す。若し凡人の深経一句を解し口に誦し心に念ずる有らば、身中の三毒四魔八万の垢の門皆自ずから安んずる能わず。何ぞ況んや博く衆法を採り世の橋梁（菩薩）と為りたる者をや。

（一五）仏、目連に語れり。「汝の対（あいて敵するもの）至らんと欲す。」

目連言う。「我れ神力有りて須弥山を超踏す。対、若し東より来れば我れ便ち西に向かう。若し北より来れば我れ当に南に趣く。なんぞ我を得んや」と。仏目連に語れり。「罪福自ずから然れば、避くること得べからず。」遠く飛びて息まずんば乃ち山中に墮つ。時に車輻の老公有り。目連正に其の前に墮つ。形状鬼に似たり。老公是れ悪物と謂

いて、車輻を挙げて之を打ち即ち其の身を折る。目連痛められ甚だ羞じて懊惱し、本の識を尽く忘る。仏之れを哀念して其の威神を授く。爾して乃ち自ら思惟を得、復た本の形に還る。是の碎（ほろ地名？）の車輻の老公、目連の前世時の父なり。目連父と諱い、目連意の中に念じて言う。「此の公を搗殺（たさう）し（打ち殺し）骨折らば快ならんや」と。是を以て此の罪殃を得たり。慎んで不孝の罪を作すなかれ。是れ以て人の生まれて世に処るに、心と口を慎みて父母に孝養せざるべからざるなり。

（一六）昔、沙門有りて草間を行くに、大蛇有りて言う。「和尚道人よ。」道人驚きて左右之を視る。蛇の言う。「道人、恐るる莫れ、怖がる莫れ。願わくは我が為に経を説き、我をして此の罪の身を脱せしめんことを。」蛇の曰く。「道人、阿耆達王の有りしを聞くやいなや。」答えて曰く。「聞けり。」蛇の曰く。「我れ是れなり。」道人言う。「阿耆達王の仏塔寺を立て供養の功德巍巍たり。当に

天上に生まるべきに、何の縁にて乃ち爾なるや。」蛇の言う。「我れ命終る時に臨み、^{かたえ}辺の人扇を持ち我が面上に墮し、我をして瞋恚せしむれば是の蛇の身を受けたり。」道人即ち為に經を説く。一心に聴くを楽しみ七日食わず。命過ぎて天に生まる。却て後数カ月、花を持ちて仏に散ず。衆人之を怪しむ。虚空に在りて曰く。「我れ阿耨達王なり。道人の恩を蒙り法を聞き天上に生まるるを得たり。今來りて花を奉り仏恩に報ずるのみ」と。是を以て臨命の人の傍側に侍衛する者、病者の心を護らざるべからず。

(一七) 外国に一人の治生(自當生計)して金銀數千斤を進む有り。意に之を甚だ重んじ地中に藏著せんと欲するも、螻蛄蟲鼠の而して之を侵し盜むを恐る。草沢中に藏著せんと欲するも、復た狐狸野獸の之を取るを恐る。復た家室の中外の兄弟妻子を信ぜず、便ち懷中に著し出入りし行き來るに恒に之を失うを恐る。時に長斉の月(在家信者が八

齋戒を守り精進する)、四輩の弟子尽く塔寺に詣り焼香散花す。此の人觀視して是の如くなるを具に見る。復た見る、塔寺の前に一の大鉢有り四輩の弟子塔を繞り金銀錢物を持ちて之を鉢中に投ぐるを。其の人問いて曰く。「なんぞ宝を投げて此の鉢中に著するや。」道人答えて曰く。「此れを名づけて布施とす。二の名は牢固藏、三の名は腐朽知らず。」其の人思惟す。「眞實に是の人の言う如くならば、吾の求むる所に^{かな}稱う。便ち金銀を持ちて尽く鉢中に投ず。道人咒願を為し又説けり。「牢固なる者、水も没する能わず、火も焼く能わず、盜賊怨家も侵害する能わず。之を宝藏に投ずれば腐壞を知らず。当来(もともと)、報い百千万倍を獲ん。故に布施と名づく。」其の人の意解し歡喜無量なり。即ち塔の前に於て須陀洹道(注④を参照)を得たり。是を以て志心に福功を作さば唐^{むな}しく捐^すつることなし。自ずから道を得るに到る。

(一八) 昔、雀離寺に一長老比丘有り。阿羅漢道

を得て、一沙弥を將いて時に復た来り下つて入城し遊觀す。衣鉢大きく重ければ沙弥をして担いて其の後に随わしむ。沙弥、道中に於て便ち是の念を作せり。「人、世間に生まれて苦を受けざることを無し。此の苦を免れんと欲すれば当に何等の道を興すべしや。」是の思惟を作せり。「仏常に讃嘆す。『菩薩勝れ為り』と。我、今当に菩薩の心を発すべし。」適^{たまたま}是の念を作すに、其の師即ち他心智を以て其の念ずる所を通照し沙弥に語りて言う。「衣鉢を持し来れ」と。沙弥便ち衣鉢を持して其の師に授与す。師沙弥に語る。「汝前に在りて行け。」沙弥適^{たまたま}前に在りて行き復た是の念を作せり。「菩薩の道甚だ大いに勤苦なり。頭を求めば頭を与え、眼を求めば眼を与う。此の事極めて難くして我が辦^{つとむ}る所に非ず。早く羅漢を取りて疾^{すみやか}に苦を離るるを得るに如かず。」師復た其の念ずる所を知りて、沙弥に語りて言う。「汝よ、汝衣鉢を担いて還つて我が後に随え。」是の如くすること三返なり。沙弥怪しみ愕きて何の意なるや

を知らず。前みて止まる所の処に至り、又手して師に白して其の意を請いて問えり。師答えて曰く。「汝、菩薩の道に於て三たび進むが故に、我れ亦た三たび返りて汝を推して前に在らしむ。汝が心三たび退くが故に、汝を推して後に在らしむ。爾なる所以は、菩薩の心を発せば其の功德勝れて三千世界に滿ち阿羅漢と成る者、喩えを為すべからず。」

(一九) 昔、迦葉仏の時、兄弟二人有り、出家して俱に沙門と為る。

兄は持戒坐禪を好み一心に道を求めて布施を好まず。弟は布施を好み福を修し而して破戒を喜^{この}む。釈迦世に出て、其の兄仏に値いて出家し道を修し即ち阿羅漢を得たり。而るに独り薄福にして常に衣食の充たざるを患^{うれ}う。諸伴等と遊行乞食するに、常に独り飽かずして還りぬ。其の弟は象の中に生まれ、象の多力にして能く怨敵を退くるが為に国王の愛する所と為り、好き金銀珍宝瓔珞を以て其

の身を（飾り）、數百戸の邑を封じて此の象に供給するに其の須むる所に随えり。兄の比丘は世の大俚に値いて遊行乞食すること七日なるも得ず。未後（最後）に少の麤食を得て殆く命を存つことを得たり。先に此の象是れ前世の兄弟なることを知りて、便ち往いて象の前に詣り手もて象の耳を捉えて之に語りて言う。「我と汝と俱に罪有らんや。」象便ち比丘の語を思惟して即ち自ら宿命を識ることを得たり。前世の因縁を見て、象便ち愁憂して復た飲食せず。象の子怖懼し、往きて王に白して言う。「象復た飲食せず、何の意か知らず」と。王、象の子に問う。「先に人の象を犯すこと無きやいなや」と。象の子、王に答えて言う。「他の異人無し。惟だ一沙門来りて象の辺に至り須臾にして便ち去るを見たるのみ」と。王即ち人を遣わし四に出でて此の沙門を求めしむ。人の林中の樹間に有るを得て、便便に此の沙門を摂し將いて王の前に詣る。王、沙門に問いて言う。「我が象の辺に至りて何の道説する所ぞ。」沙門、王

に答えて言う。「多く説く所無し。我直に象に語りて言う。『我と汝と俱に罪有るのみ』と。」時に沙門、便ち王に向かいて具さに前世の因縁の事を説く。王、意に便ち悟りて即ち此の沙門を放ちて止まる所に還らしむ。是を以て福を修する家は戒と施を兼ね行いて、偏執して功德不備なることなかれ。

（二〇）昔、一比丘有りて、擯けられ懊惱し悲歎し啼泣して行く。

道に一鬼に逢う。此の鬼、法を犯して亦た毘沙門天王の為に擯けらる。時に鬼、比丘に問いて言えり。「汝、何事か有りて啼泣して行く。」比丘答えて言う。「僧事（僧の為すべきこと）を犯し衆僧に擯けらる。一切の檀越（注（8）を参照）の供養失い尽く。又悪しき名声遠近に流布す。是の故に愁歎し啼泣するのみ。」鬼、比丘に語りて言う。「我能く汝をして悪しき名声を滅し、大いに供養を得さしめん。汝便ち我が左肩の上に立つべし。我当に汝

を擯（担？）して虚空中を行かん。人但だ汝を見て我が身を見ず。汝若し大いに供養を得ば、当に先ず我に与うべし。」彼の鬼、即時に比丘を担ぎ、先に擯けられし聚落の上、虚空中を行く。時に聚落の人見て皆驚き怪しむ。其れ道を得たらんと謂い、相を転じて謂いて言う。「衆僧無状（無善状）なり。得道の人を枉擯したり（罪をおしつけて斥けた）。」時に聚落の人皆此の寺に詣り衆僧を訶責す。即ち此の比丘を送り寺内に住せしむ。遂に大いに供養を得たり。此の比丘随所に衣食諸物を得て、輒ち先ず鬼に与えること本の要めに違わず。此の鬼、異日復た此の比丘を擔ぎ空中を遊行して正に毘沙門天王の官属に値う。鬼、伺官を見て甚だ大いに驚き怖れ比丘を擲げ棄て絶力もて走る。此の比丘遂に地に墮ちて死し身首碎爛す。此れ、行者の宜しく応に向かいて疑い無き所を自ら修すべし。豪勢に恃託して一旦傾覆せば彼と異なる無きを喻うるなり。

（二一）昔、目連、弟子と俱に耆闍崛山從り下り王舍城に到りて乞食す。

目連道中に於て虚空を仰ぎ視て悵然として歎ず。其の弟子問う。「何の因縁にて歎するや。」目連答えて曰く。「卿、知らんと欲さば、須く仏の所に還り到りて便ち問うべきなり。」是に於て乞食し訖りて仏の所に還り到り、其の弟子便ち向（きま）に歎ぜし所の事を問う。目連答えて曰く。「我れ虚空中を見上ぐるに一餓鬼有り。身極めて長大にして其の状醜惡なり。七枚の熱き鉄丸有りて口中從り入りて直下に過ぐ。既に下り過ぎ已つて還た口從り入る。身を挙げて焼然し苦痛に宛転す。絶倒して更に起き、起きて復た還た倒る。是の故に歎ずるのみ。我れ独り見るに非ず、仏も亦た之を見る。」弟子問いて言う。「何の因縁を以て苦しみを受くることは是の如きか。」目連答えて曰く。「汝自らはを以て仏世尊に問え。」其の弟子即時に仏に白して其の因縁を問う。時に仏答えて言う。「此の餓鬼は前世にて曾て沙弥（た）為り。時の世、極めて儉し

て豆を以て食と為す。沙弥は衆僧の為に食を行ず。其の師の前に至り偏りて七枚豆を多くす。是の罪を以ての故に餓鬼の身を受け苦毒是の如し。」仏の言う。「我も亦た常に見るも説かざる所以は、人の信ぜずして極重罪を得るを恐るればなり。」此の喻は世間に豆少なく偏えに師の為が故にして自らは入れざるに、其の罪猶お爾なり。況んや當に仏般若を説けるに而も信を生ぜず返つて更に誹謗せば、其の罪五逆より重く地獄の苦を受けること極めて重く数を称うべからざるなり。

(二二) 昔、一居士有りて其の婦妊娠す。

仏を請じて舍に到り供養し畢りて、如来をして其の婦の後に生む子を占せしめんと欲す。男女を知らんと欲す。仏の言う。「後に當に男の端正姝好なるを生むべし。長大に至るに及びて當に人中に於て天上の樂を受くべし。後に當に羅漢道を得べし。」居士之を聞きて心に疑いて信ぜず。後に復た六師（六人の外道？）を請じ供養し畢りて復た之

を占せ使む。居士六師に語りて言う。「前に瞿曇沙門に之を占せ使むるに、言えり。『後に當に男を生むべし』と。實に是れ男なるやいなや。」六師答えて言う。「當に女を生むべし。」彼の六師等、仏法を憎嫉し苟くも相反かんと欲す。還た自ら思惟して言う。「若し彼男を生まば、居士當に我を棄て瞿曇に奉事すべし。」便ち詭語を作して居士に語りて言う。「汝が婦、當に男を生むべし。男を生むの後、方に大凶禍ありて家室親屬七世絶滅せん。不吉を以ての故に我れ先に詭りて是れ女なりと言う。」居士之を聞きて心大いに惶怖し所以を知らず。彼の六師等、便ち居士に語る。「吉利を得んと欲さば唯當に之を除去すべきのみ。」六師便ち居士の婦の為に腹を按ず。兒を墮せしめんと欲して反つて其の母を害す。居士の婦は遂に便ち命終るも兒は死なず。宿命福德の故なり。居士便ち其の婦を棄て死人処に著す。大いに薪を積み之を焼く。火炎既に盛んなり。仏便ち諸弟子を將いて往きて之を觀る。居士の婦の身始め破れ壞れ

て、便ち其の児蓮華の上に在りて坐せるを見る。端正姝好にして顔貌雪の如し。仏、耆域（しよきやく）をして此の児を取り来らしむ。耆域火に入りて児を抱き来りて出で、本の居士に還す。遂に便ち養育して年十六に至り、才美（才と色）人に過ぐ。便ち広く多くの美なる飲食を設け、彼の六師を請ず。六師既に坐し、未だ久しからざるの間に便ち失笑す。其の人問う。「何が故に笑うや」と。六師答えて言う。「吾見る、五万里に山有り、山の下に水有りて、獼猴有りて水中に落つるを。是を以て笑うのみ」と。此の児、其の虚妄なるを知りて、便ち鉢中に種種の好羹を盛り飯を以て上を覆う。人をして之を擎（ささ）げて與え使む。余人、鉢中下に飯を著し上に羹を著す。諸人皆食するに、唯六師のみ独り瞋りて食せず。主人問う。「何が故に食せざる」と。六師答えて言う。「羹無し。云何が食せん。」主人の言う。「君の眼乃ち五万里に獼猴の水に落つるを見るに、何ぞ飯の下に羹を見ざるや」是に於て六師大いに瞋り竟に食せずして還る。居士及

び児、是に因つて奉事せざるを止め、仏法僧に歸命す。仏、為に種種に法を説き、遂に道果を得。此の喩え極めて多ければ、略記して真偽を明らかにすることは是の如し。

（衆經撰雜譬喻卷上）

（大正大学綜合仏教研究所研究員）

《参考文献》

- イグナル・ムカッフアイ／菊池淑子訳 [1978] 『カリラとデウムナ アラビアの寓話』（東洋文庫331）、平凡社
 定方晟 [1989] 『雑譬喻經』訳注（『東海大学紀要文学部』Vol.51）、東海大学文学部
 昭和新纂国訳大藏經編集部編 [1930] 『昭和新纂国訳大藏經經典部第2卷』、東方書院
 菅原法嶺訳 [1931] 『百喻經・雜譬喻經』（仏教文庫）、東方書院
 杉山龍清 [1991a] 『雑譬喻經類について（一）』（『立正大学大学院年報』Vol.9）、立正大学
 杉山龍清 [1991b] 『雑譬喻經類について（二）——衆經撰雜譬喻』収載の譬喻説話をめぐって（『論集』Vol.18）、印度学宗教学会
 孫昌武・李廣揚 [2008] 『雑譬喻經訳注（四種）』（『仏教經典訳

注叢書』、中華書局

柳瀬睦男 [1987] 「月の鼠 日の鼠—時の譬」(『ソフィア』: 西洋文化ならびに東西文化交流の研究) Vol.36-2、上智大学

Yuet Keung Lo (勞悦強) [2002] 'Persuation and Entertainment at Once: Kumārajīva's Buddhist Storytelling in His Commentary' (『中國文哲研究集刊 第二十一期』、中央研究院中國文哲研究所)

(1) 『出三藏記集』卷八、僧肇「維摩詰序」に「大秦天王。

…每尋翫茲典以為栖神之宅。而恨支竺所出理滯於文。常懼玄宗墜於譯人。…以弘始八年歲次鶉火。…於常安大寺。請羅什法師。重訳正本」(大正五五・五八頁中七〜一四)とある。

(2) 「時手執胡文口自宣譯道俗虔度一言三復。陶冶精求務存聖意。其文約而詣。其旨婉而彰。微遠之言於茲顯然」(同上五八頁中一六〜一七)。

(3) Yuet Keung Lo (勞悦強) [2002]、89〜116頁を参照。

(4) サンスクリット *śrota-apatti* (須陀洹)。「注維摩詰經」に「肇曰。国土穢而可淨。淨而復穢。因悟無常故得法眼淨。法眼淨須陀洹道也。始見道跡故得法眼名」(大正三八・三三八頁下)とある。

(5) 『維摩詰所説經』(羅什訳)の「方便品」に「是身如丘井」とあり、それに対する羅什の注釈にこの喩えが引かれているが、そこでは「丘井」生死、醉象無常、毒竜惡道、五の毒蛇五陰、腐草命根、黑白の二鼠

白月・黒月、密滴五欲の樂」とされる。(参照)『対訳注維摩詰經』(大正大学綜合佛教研究所 注維摩詰經研究会、山喜房仏書林、二〇〇〇年、一二二頁)。

(6) 阿耨多羅三藐三菩提 (*Anuttarasamyaksambodhi*) の古訳。「維摩經」でも支謙訳『仏説維摩詰經』ではこの語が用いられている。例えば、「如是維摩詰為諸問疾者如応説法。令無數千人發無上正真道意」(大正一四・五一頁中二六〜二七行)や「説是語時。世尊。八百居士發無上正真道意。我無比并。是故不任詣彼問疾」(同、五二二頁上五〜七)など。

(7) サンスクリット *pindapāṭa* の音訳。乞食、托鉢の意。

(8) サンスクリット *danapati* の音写で、施主のこと。

(9) サンスクリット *jīvaka* の音訳。耆婆とも呼ばれ、開腹手術や頭蓋骨の縫合手術をしたと伝えられる名医。

